

清水正之さんとお別れ会

昨年5月12日にお亡くなりになった清水正之さん(NPO法人国際造園研究センター初代理事長)を偲び、「清水正之さんとお別れ会」が、平成28年6月25日大阪市中央区のプリムローズ大阪でしめやかに、また厳粛に行われました。清水さんのすばらしいお人柄を反映して、地元の方を始め、遠来からの知人・友人、大阪府や花博協会などの職場関係、大阪芸術大学の教え子たち、造園業界やNPOの関係者など、多くの方々がお集まりになりました。国際造園研究センターはこの会の裏方として動き、無事に会が終了したことをご報告しておきます。



通常総会

平成28年6月10日午後2時30分から、ホテルプリムローズ大阪において平成28年度通常総会を開催しました。正会員60名の内過半数の38名の出席となり、本総会は成立し、吉田理事長を議長として提案された平成27年度事業報告および決算報告書、平成28年度事業計画案及び収支・支出予算案ならびに総会議決事項の委任は原案どおり可決されました。総会終了後、山内美陽子新理事による「谷町空庭の活動(農ある暮らしとぐりぐりマルシェ)」について講演があり好評でした。

編集後記

庭園文化塾が若い人たちに好評です。伝統を育み歴史を感じる面白さがいまの世代や日本を訪れる人たちの目を引くのは当然至極のことですが、それがいまの造園、街づくりに生きているのも興味があります。当センターの顧問、近藤公夫さんが亡くなられて、以前作庭記の講演をしていただいたことも思い出し、この事業の重さを感じさせられます。

二木サロンは話題提供者からの意外な話の展開も見られ、毎月楽しみです。情報の発信を期待され、ホームページと連動させたフェイスブックの閲覧率も上がってきました。関東にも時々お邪魔することもあります。大きな計画や新しい技術への熟度への関心は高いとはいえ、造園のネットワークの希薄さを感じます。その意味での情報量の多さではサロンも自慢していいのではないかと考えています。ぜひ毎月第2木曜日の夕方センターを覗いてみてください。(事務局)

◎ご入会の案内

当センターは都市緑化への協力を努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10,000円	10,000円
団体正会員	50,000円	30,000円
賛助会員	30,000円	20,000円
友の会	免除	3,000円

◎ご寄付のお願い

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆さまのご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。尚サロンでは持ち寄り運営しておりますので、更にご協力をお願いします。

◎ご寄付

43,000円 (吉田昌弘、辻正信、福原成雄 (敬称略))

◎新入会員のご紹介 (平成29年4月末現在)

個人正会員 柿谷武司 信貴実
友の会 西浦哲也

NPO法人 国際造園研究センター会報

No.14
2017
6月発行



今秋、NPO法人国際造園研究センターは、設立15周年を迎えます。平成14年9月、故清水正之元理事長の呼びかけにより、「産」「官」「学」の各方面から、造園研究者・技術者が集まり、当センターが発足しました。目的は造園研究および造園文化の普及啓発に幅広く寄与することですが、これに関する事業を具体的に推進するため、当センターでは、研修部会、緑化部会、国際部会、庭園部会を設け、それぞれの特徴を生かした事業を進めてきました。

1 研修部会では、

会員、非会員を問わず、毎年優れた業績等を有する講師を招いて、講演会、研修会を企画してきました。

2 緑化部会では、

具体的な樹木の剪定手法の研究に始まり、近年では、研修部会と合同で「浜寺公園の松の保全」についての調査研究等を行っています。

3 国際部会では、

イギリスのウィズリーガーデンにおける和風の滝の設計監修のほか、タイの国際園芸博の見学会(平成19年)や、中国の造園視察ツアー(平成24年)等を開催しました。

4 庭園部会では、

平成15年より毎年2~5回の庭園見学会(一般参加を含む)を開催し、この一環として平成25年には、見学した庭園39ヶ所について、「庭園見学ノート」としてまとめました。また平成27年度からは若手の造園技術者を対象とした「庭園文化塾-日本庭園の特色を現代の造園空間に活かす手法等を学ぶ-」を開催しています。

こうした活動のほか、当センターでは前述の「浜寺公園の松」については、いずれは「松林の保全育成の指針」として活用されるべく、関係者等と連携して調査研究にも取り組んでいます。また故清水正之氏が収集された資料等に基づき、大阪府の公園制度や特質について「公園アーカイブ」として整理する調査研究作業を、京都大学、東京工業大学等の研究者と交流しつつ進めています。

このほか関連団体および業界団体とは相互交流の意図を含めて、様々な行事に協賛し、あるいは共同して行事イベントに取り組む等、幅広い活動を行っています。

以上に加え当センターでは「二木サロン」として毎月第2木曜日の夕方から、毎回話題提供者を中心に、自由に意見を述べ合うサロン形式の会合も開いています。

このように当センターでは、幅広い活動を現在も進めており、ここ数年はやや高齢化の傾向もありましたが、一方で新たに若い会員も増えてきております。今後緑・環境に対する社会的要請がますます高まると予想される現在、会員の増加と更なる活動の充実・展開に向けて一層努力する必要があると考えています。

理事長 吉田 昌弘

NPO法人 国際造園研究センター

〒540-0021 大阪市中央区大手通1-4-2 ワイズ谷町ビル202号 TEL: 06-6944-2040 FAX: 06-6948-5282

ホームページ <http://www.klrs.org/> メール kslrs02@mist.ocn.ne.jp ©facebook始めました [Q 国際造園](#) で検索!

改めて「造園」を考える

造園という言葉。私たちの仕事は「造園」という言葉で一般の方に理解してもらえているのだろうか。少なくとも「造園を携わる私たち」への理解は「造園屋」とか「植木屋さん」と思われている。この事象に対して造園と名の付く団体を進めながら言っているのかどうか、自信のない、また納得のいかない気分で、また常々疑問を持ってきた。「ミドリ」の一言で、庭園・公園・緑地・自然環境の保全等々、またこの中に(造り計画する以上当然のことだが)マネジメントが入ってきて、個々違ったものへの縦横行政対応の混乱も大きいとも思われる。

最近の論考で(思考のコピペというものに他ならないが)進士五十八さんの都市緑化技術2017no.102(公益財団法人都市緑化機構の機関誌)の巻頭言「造園の原点技術」、同じく、「隈研吾氏の『庭の時代、コミュニケーションの時代』考」(平成28年度公園緑地研究所調査研究報告)からの小気味のいい忠告の引用をさせてもらいたいところだが言葉足らずもあり、ぜひご拝読をお願いしたい。その進士五十八さんは「緑化は手段、目的は造園」と言っており、どちらの言葉も終始気になっていた私は、わが集団から外向けへ「世論」、そのアピールとして、先生にじっくり話を聞くこともできず悩んでいる。

当センターの、特に二木サロンに参加していただく話題提供者の方々にも「造園」と言う言葉が私たちの仕事をすべてカバーしてくれていると思うかとの唐突な質問に軽い否定の返事が返ってくる。ではどうするかである。我々は節目となる時間を目途に後ろを振り返り、また前に進む。大阪府においては府の公園ができて120年、135年といったイベントを企画し、その記念誌を出すなど結構大きなイベントとして対応している。大屋霊城の時代、半ばスラム化せんとした公園というものをPRするために公園祭を開催し、「へ見たか聞いか」の住之江公園節や浜寺、箕面などの絵葉書が飛ぶように売れ、住江公園野球場では彼自身「あまり大きな声では言えぬが名物ダンサー対カフェウェーター野球戦などは無慮3万人の観覧者！」との言。当時南海電鉄、阪堺電鉄も破格の割引運賃の優遇措置という賑わいも援護射撃となる。市民のニーズの移り変わりはあるにせよ、今、2020年東京オリンピック、パラリンピック、2023年日本の公園の発祥と聞かされてきた太政官布達公園150年、2025年次期大阪万博開催として手を上げている年、といった機運に向けて大きな節目、イベントを控えている。

ぜひ、「みどり」と「造園」からの積極的なアプローチを試みたいと思う。

繁村 誠人

はばたける造園の若き獅子よ

田中 明男

今年の桜は、昨年よりスローペース。花見に雨の無情も若干ありましたが入学式には見事に花を添えてくれました。サクラは私にとって真新しい制服に身を固め、夢と希望に胸をふくらませて造園の門をくぐった過ぎし日、昔の自分を思い出させてくれる花でもあります。今年度も特定非営利活動法人国際造園研究センターは、昨年に引き続き『造園文化塾』を開講します。

今年で第3回目を迎え、毎回10名程度の方々の参加をいただいております。造園文化塾のテーマである「日本庭園について学ぼう」と言う塾生の意欲に押され、毎回お約束のティータイムにまで白熱したお話が続きます。

年間を通じ8回の座学の他に、4回の庭園見学がプログラムされています。

庭園見学会は、講義での情報と現場とのすり合わせをし、ただ観光的に見るのではなく、その魅力と構成をつかみ取る場でもあります。

いま、世間を見渡せば観光立国を合言葉に、インバウンドの増加を受け、さまざまな取り組みが進んでいます。私たちの業とする造園業界も少なからずその影響を受け、「日本庭園を世界文化遺産に！」との声も聞こえ始めています。

国交省においては世界に点在する日本庭園について、調査保全に着手すべく計画を進めているようです。

しかしながらそれを支えるべき私たち造園業界の現実にはなほだ厳しく、あまたの造園会社において『日本庭園』は死語となっている現実があります。

一言でいえば、社会環境の変化による需要の減に起因することですが、世界に誇る文化である日本庭園を『造る！育てる！守る！』技術を継承することの意義は言うまでもないことであり、一部の地域や事業者だけにゆだねるべき事ではありません。



庭園文化塾現地見学風景 (大河内山荘)

それぞれの風土、文化に根付いた日本庭園の未来を開くべく、青雲の志高き若き獅子たちよ。

『お出会い召され造園文化塾でござる』

◎ 浜寺公園の松林の未来は？

平成28年12月15日(木)午後2時半から、谷町センタービル9階会議室で国際造園研究センター研修会が、定員40名満席の盛況のうちに開催された。中田理事の司会進行により、基調講演は前中久行副理事長(元大阪府立大学教授)が、講演は大野朋子神戸大学准教授・谷岡芽華(神戸大学生)・辻正信理事(南海造園土木株)の3名が、順次、パワーポイントを使って浜寺公園の歴史、松林の変遷、松林の現状と課題等について話題提供があった。その後、休憩をはさんで参加者との質疑応答、意見交換があり、大変有

意義な研修会であった。

万葉集の時代から歌に歌われ、多くの歌人を魅了した浜寺公園(当時は高師濱といわれた)の松。開発など、幾多の滅亡の危機に瀕しながらも、今もその美しい姿をとどめていることや、古いものは300年以上生息していると推定される松の生命力に驚かされるとともに、その成長力ゆえに、林内の分布本数が過密となり逆に生育が脅かされる危険があること、また散策などの公園利用との摩擦が生じていることなど、問題点が浮き彫りにされた。

糸谷 正俊

国際造園研究センターは、過去3カ年にわたり、浜寺公園等に関する古くからの資料を集め、整理する、府営公園アーカイブス調査に関与してきたが、今後は、これらの成果を踏まえ、浜寺公園の松林の将来像(マスタープラン)の作成が必要と思われる。また、地元住民や堺市など関係者とも今後継続して松林と公園の将来について話し合い、浜寺公園誕生150年にあたる2023年には、名実ともに日本一の松林公園として再生されることを期待したい。

